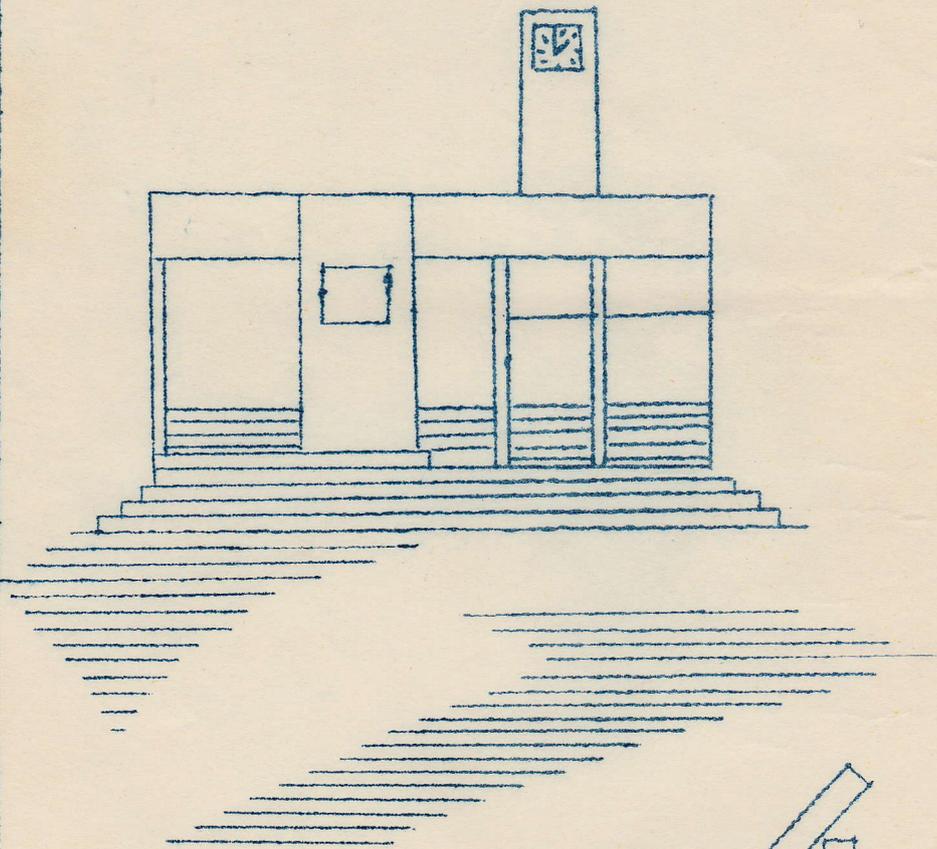


のすたるじす

— 名大祭 総括号 —

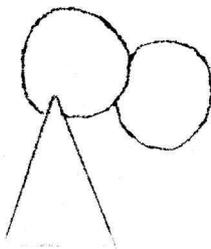
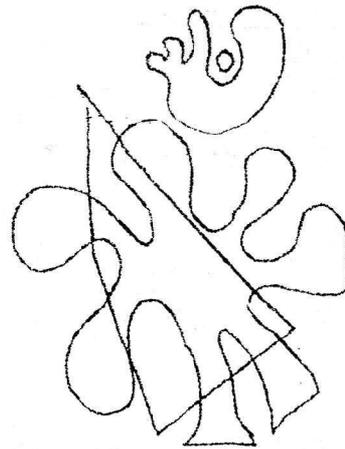
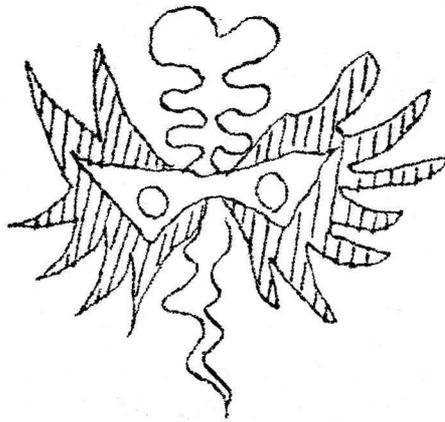


4

名古屋大学 郷土研究会

ここに『のすたるじす』が4月号が完成した。これは、名大祭、絵描きとして発行され、私たちが名大祭をどのようにとりくみ、またどのようにして発表したか、またどのような反省がなされたかを、一目瞭然と綴ることが出来るようになされたものである。また同時に、(当然なことではあるが、最も重要な役割を果たす)これからの私たちの活動をより充実したものにするために必要なものでもある。また、これまで『のすたるじす』が文集として発行してきたが、本号は機関誌としての役割を持っていく。それゆえ過去一年間の活動と反省とこれからの活動計画も含まれ、本号の発行される役割を果たすと思われる。なお、『のすたるじす』が5月号が、文集として近く発行される予定である。

(行本)



目次 のすたるじす、わ4号

- 編集委員 序 ----- 寺本
- 郷土研究会の活動の意義 ----- 樋口
- 名大祭に参加して ----- 西川(菊)
- 展示・発表の内容
 - 松平氏の発展史
 - 家康の祖先を探る ----- 西川(菊)
 - 松平氏と戦国大名との関係を探る ----- 寺本
 - 農民の生活—農民中心— ----- 池田
 - 関ヶ原の合戦
 - 合戦の民衆に及ぼす影響 ----- 塚本
 - 武村と旗指物 ----- 塚本
 - 武器と合戦形態 ----- 杉浦(菊)
 - 合戦場の小荷駄の群 ----- 平野
- 名大祭とりくみ経過 ----- 西川(菊)
- 名大祭の反省 ----- 白瀬
- 展示教室の配置

△一年間の活動と反省 ----- 梶浦

△今年度の計画 ----- 柴田

△我が郷研への提案
ユートピア ----- 伴

△住所録
△編集後記

郷土研究会の活動の意義

郷土研究会。『なんだい？』我々部員がよく耳にする言葉である。そして聞いては、現にやっている、又は過去にやっていた活動の紹介でその質問に応じている。そんな時、何故そんな事をやっているのか、我々がやっている事にどういう意味があるのか、考えることはまれである。

そんなふうに郷研を見る必要はないのかもしれない。ただそういう事をやりたい者が集まり、やりたい事をやればいいのかもしれない。少なくとも入会の動機、会発足の動機としてはそれで十分だと思つ。しかしそういう自己満足的な状態から、サークルとして存在するに充分の意義をその集団が認識しなければ、会の存続は不可能であるし、個人の興味に答

える活動も出来ないであろう。又たとえ自己満足的な活動であつても個人個人その活動に意義を認識しているだろう。そこでその個人が認識している意義を討論し、活動の中で体験し、新しく発見していくことによつて、より包括的な、より明確な、より高い意義をもつた活動に発展させていかなければならない。その段階で我々の会は単に個人的な集団でなく、客観的(社会的)にも意義ある活動を行なうことが出来るであろう。同時に我々の活動が社会とも何らかの関連をもち、社会の中で(少なくとも大学の中で)責任と義務を分担している状態になつていなくてはならない。その責任と義務とは押しつけられたものでなく、そういう団体として自ら湧いてくる使命感のようなものである。そして活動の有意義さ、価値を感ずれば感ずるほど、使命感は強くなり、会の中に、責任感が、義務感が、活動のエネルギーが湧き上がつてくるだろう。いいかえれば、より有意義な、より価値ある活動、精

神を、求めて活動するであろう。

以上のような立場で、郷土研究会の念としての活動の意義を考えてみよう。

(もちろんそれは前記のように、会員個人が郷土を研究する意義と矛盾するものではない。) この念に参加するほとんどの者が、いはゆる郷土史家的な興味をもっている事と思う。そして今までその興味にささえられず活動して来たし、このからもしその事が中心になることだろう。そしてその郷土史家的な興味と裏表的に、素朴な風物、自然の美しさへのあこがれを強く感じている。そういう興味、あこがれの根源を探る事が我々の活動をより正しい方向へ発展させてくれるだろう。

その興味、あこがれを強く感じる現代社会の中、合理化、機械化されて行く社会の中で我々は便利になっていく社会環境にある時は感謝し、一層便利になることを願っている。そして電算機の出現が

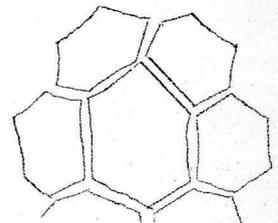
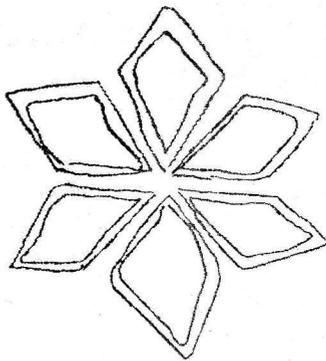
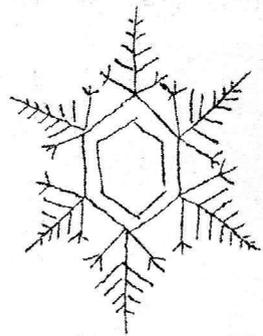
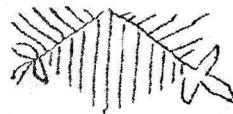
象徴しているように、科学は人間の非合理的な面は全く否定し、社会を数量化して一次的にしてしまおうであろう。そこでは人間は個性を失い、科学が生んだ理想社会へ適応して行かざるを得ないであろう。本来の自己の人格にとつてよそもの、別な物にさせられてしまふ。いはゆる自己喪失、人間疎外の社会へ進もうとしている。

この様な現代社会の状況の中で、我々は郷土を知るといふ手段で自己を取り戻し、非人間化から脱脚しようとしている。郷土を知ることによつて土地への愛着を強め、それが自己の存在をより強く感じさせてくれるであろうし、過去の歴史を知ることによつて、単に郷愁の中に閉じこもるのではなく、現代と過去のつながりを知り、自己の存在の意味をも明らかになつていくであろう。素朴な風物、自然に触れることによつて、本来の人間性を回復し、あすへのエネルギーを生み出していくであろうし、それらの活動が人間のあるべ

キ姿を暗示してくれるであろう。マスコミの発達、科学の進歩によって、「居ながらにして……」という状況を創り出している事を考えれば、実際に歩き、肌で感じる事、それ自体が強く要求されるのである。我々の活動がそこに重きを置くこととしてゐる由縁である。又実際に歩き、体験することこそが、前に述べた興味、あこがれを最も適確に満してくれるものと信じる。

一言でいえば、我々の活動は郷土、心のふるさとの追求、体験によって非人間化、自己喪失の社会に対処する。といえよう。そして自己喪失という社会的な問題、歴史的な課題に我がサークルは応じていかなければならないし、そこにサークルの存在意義があり、社会的責任があると思うのだが。

(樋口)



名大祭に参加して

ここでは、クラブとしての名大祭参加の意味などについて考えてみたい。そして次ぎのらつを、その意味と考える。

(一) 一般の人々に身近な郷土を知ってもらう。そしてともに考える。郷土とは何か、郷土研究の目的」という問題は置くとして、人は漠然とでも、自分の身近なこと——自身の住んでゐる土地のこと、そしてそこに生きた人々などを知りたいと思う。しかし、日々の生活に追われ、その希望を果し得ないのが実際であろう。私達の発表はその希望のわずかでも実現するものだと思つて、そして、展示物説明中、人から教えられたことを記憶している。

(二) 私達の研究、活動をまとめ、発表する。名大祭は、今までの活動の成果を

まとめ、補足し、発表する場であるとともに、他から批判・助言をあおぐ機会でもある。

(三) 新旧部員をつなぐきずなを作る。

お互いの長心を知るためには一緒に仕事をしてみることだと言うが、名大祭にとりくむ4・5・6月にかけて共に調べたり、歩いたり、作ったりしてゐるうちに、クラブの事もあつましめかり、人間的な親しみがわいてくる。

(四) 他校・他研究グループとの交流の場
(五) 民衆を考へる。

今年の名大祭参加の意味として「民衆を考へるをあげたい。昨年十月から「徳川家康」のテーマの下に活動を進めたが、総括として「流れを追ひ」「合戦中心であったこと」「民衆の生活をとりあげたい」という意見が出され、「民衆をいふこと」が、今年の名大祭参加の大きなテーマとなつた。しかし、

民衆とはつかみにくい。事実、「不徹底だ」との批判をうけたが、これからもうと根を張った活動を進めることができたらと思う。

私達の郷土研究会が名大祭に参加したのは、昨年に続いて今年でやっとな二回目になります。ワラブ一年間の活動のなかで大変重要なものとなってきました。構想を立ててから、約2ヶ月半、実際の準備に1ヶ月以上かかることからこれもそれは立証されます。これからも名大祭に参加し、どんどん向上した企画を生みだしたいと思うし、実際立派な企画がなされるだろうと思います。しかし、これからの問題として心配に思うのは、名大祭参加が究極の目的となり、ワラブの日常活動がおろそかにされはしまいか、ということ。名大祭はあくまでもワラブ活動の一環であり、名大祭のための活動。

研究ではないと考えたのです。又、「民衆の生活の不徹底」と関連して、「名大祭」に間にあわせろための、その場限りの研究では不十分だ」という意見を尊重したい。日常活動の成果がそのまま名大祭に反映され、発表内容に生かされるようにしたいと思う。

以上、なんののかんのと述べてきたが、結局「日常活動の充実」に行き着く。それは、名大祭参加以上に重要な問題であり、ワラブ全員で真剣に考へなければならぬ問題だと思ふ。

(西川義永)

MEIDAI

SAI

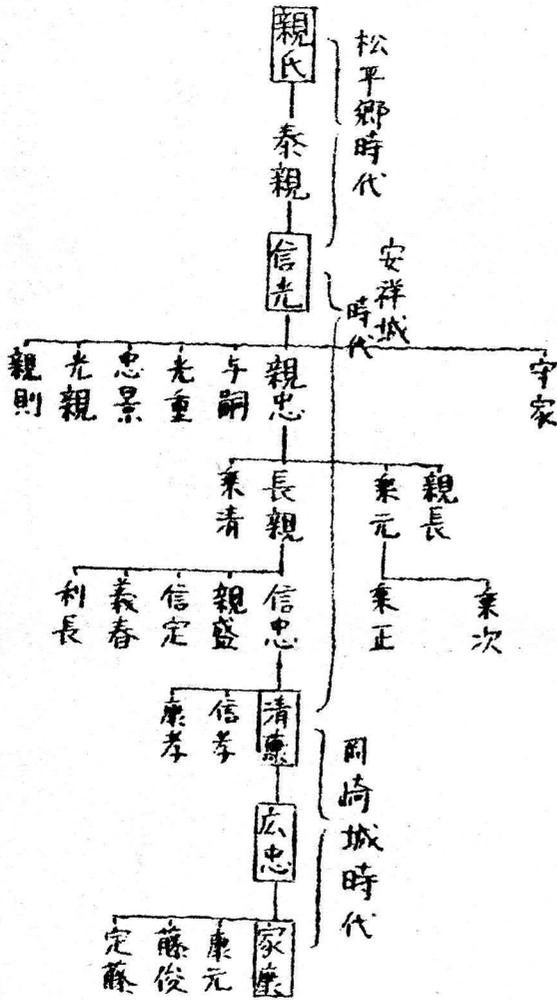
YOKEN

YOKEN

松平氏の発展史

I "家康の祖先を探る"

1 松平氏略系(家康公伝参考)



2 松平族党の発展過程

。第1段

松平郷時代

親氏 — 泰親 — 信光

。第2段

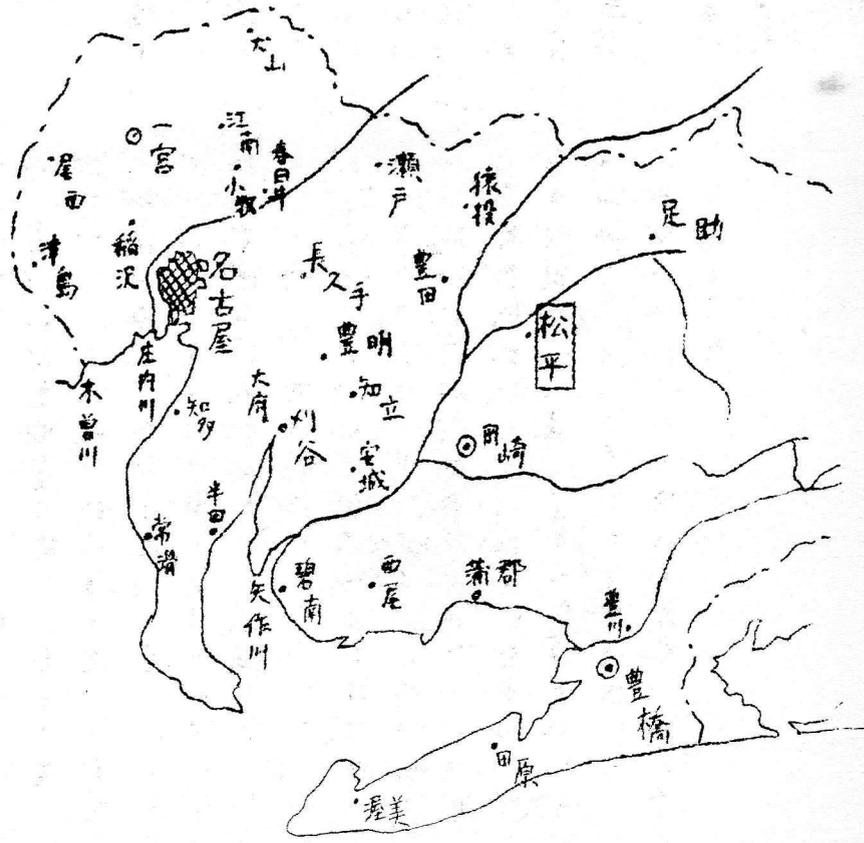
安祥時代

信光 — 親忠 — 長親 — 信忠 — 清康

。第3段

岡崎時代

清康 — 広忠 — 家康



3 松平族党の地盤を固めた

松平信光について

生まれは延永11年(一四〇四)で、没したのは長享2年(一四八八)7月22日、55才であった。彼の成功は三つの要素を兼ね備えたからであった。その一つは卓越した才能の持主であったことである。その二は無類の長命であったこと。その三は驚歎すべき子福者であったことである。彼は伊人の子女の父として能くこれを結束し、55才という長寿の晩年に至るまで活動力が衰えず、その才能を十分に發揮して族党建設の偉業を大成したのである。

次に簡単に彼の行動を年令を追って書いてみると、18才の時(一四二一)、父と共に矢作川の東岸にある岩津城を略取し、37才の頃父に死別してのち、松平氏の嫡統として輝かしい功業を成したのである。彼は父の死の7年前(一四三九)に繼村に於

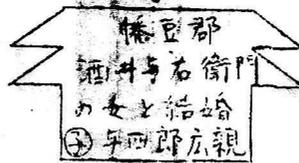
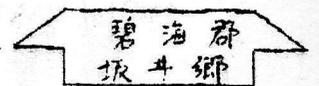
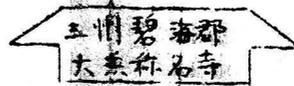
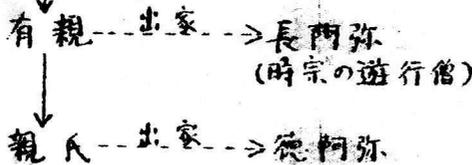
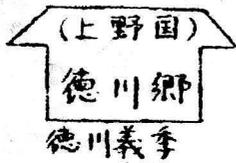
松寺を建て、宗徳3年(一四五二)48才の時、岩津に信光明寺を建て、寛正2年(一四六一)55才の時、妙心寺を建てて出家し、和泉入道月堂と号した。それから10年後の一四七一年7月15日、矢作川西方平原地域の要衝安祥城をほとんど戦闘を交えることなく奇計を弄いて易々と攻略した。彼が19才の時であった。岡崎城接收は70才以後のことであろう。時はまさに応仁の乱であって戦国の群雄割拠の頃であり、この重大なる転換期に臨んで、信光は松平家の物領を4代親忠に譲って信光の岩津在城50年時代は終り、4代親忠より7代清康に至るまでの安祥城約50余年時代が始まったと見ることができる。

4 松平族の始祖

松平親氏につけて

松平太郎左衛門親氏の経歴はあまり明瞭ではない。歿したのはの康安元年（一三六一）4月20日ともいい、の応永元年（一三九四）とも、の応永20年（一四一三）とも、の応永28年（一四二一）とも、の応永35年（一四二八）とも、の永享9年（一四三七）とも、の康正2年（一四五六）とも、そして、の応仁元年（一四六七）4月20日ともいい、異説紛々として帰する所を知らない。通説すれば南北朝の中頃より室町時代の中頃、14世紀の中頃までの間に死んだこととなる。

父有親と共に時宗の遊行僧となり、流れ流れて三州松平郷に落着いたのだといわれ、親氏は新田義重の子、徳川義季より出たといわれている。



義季の居所徳川郷は上野国新田郡尾島町の地である。それで有親・親氏父子は、足利政権の圧迫を逃れて出家し世を晦ました。うてあつて、父有親は長阿弥といい、親氏は徳阿弥といつた。徳阿弥は三州碧海郡大浜の称名寺に居たが、やがて同郡坂井郡に移り、五郎左衛門の女との間に小五郎親清・清次・宏親をもうけ、これが酒井氏の始祖となつたと伝えられている。親氏は妻酒井氏の死後、松平郷に移つて松平太郎左衛門信正の一女の婿となり、松平家を起したといふのであるが、これらの所伝の裏づけとなるべき確実な直接文書がなく明確な結論は下せないのが実情である。

II 松平氏と戦国大名

との関係を探る

——清康と宏忠を中心にして——

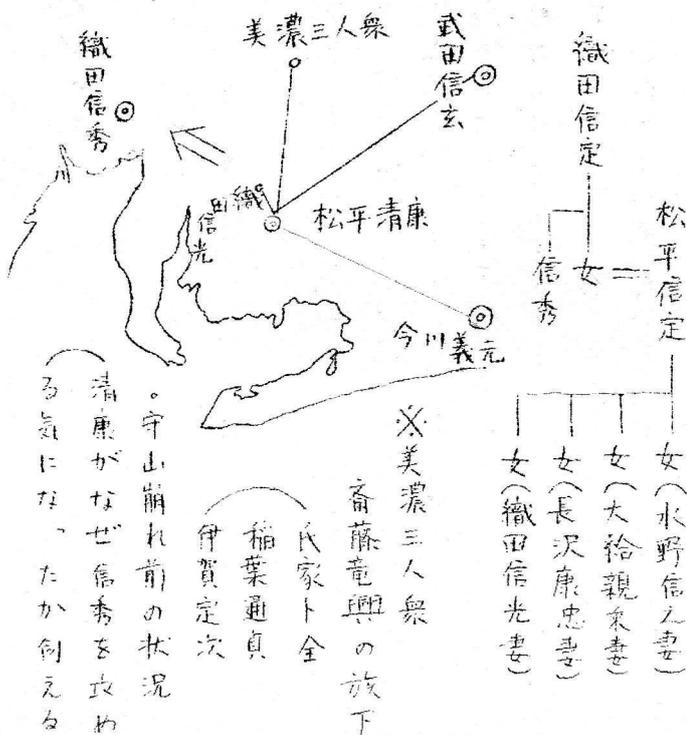
1 松平清康の概略

松平清康は永正8年（一五一一）安祥城において生まれた。小柄ではあるけれども俊敏頓悟であつた。西郷信貞の属城山中城を攻めて居城岡崎城を奪還したので、清康は大永4年安祥城より岡崎城に移つた。ここに松平氏のオウ段階、岡崎城時代が始まつた。享禄2年（一五二九）吉田城を攻めて、叔父信定の戦策により牧野兄弟をたおした。また、先を転じて品野・岩崎・広瀬・寺部城を攻めた。天文4年（一五三五）清康は、守山前村の際、家臣によつて殺された。

天文4年(一五三五)12月、清康は織田信秀を攻めようとして西上の途に上り、4日守山(森山)に着いた。5日夜明け前、陣中において思いがけなく家臣阿部弥七郎に斬殺された。

事の起りは、宇利を攻略するにあたり、松平親次が敵に來襲されて戦死するのを、松平信定が傍観して救わなかったのを清康が詰責したことに始まる。そして、信定が逆心を懐いているとうわさされていたので、老臣たちは守山布陣を危ぶんだが、清康はかんとして動じなかった。そんな状況の中で、信定と親しい阿部定吉は自命もまた逆心をいだいておるといいうわさを聞いて、長男弥七郎を招き誓詞を渡して、「万一自命が誅戮(ツクリク)されたならば、この誓詞を提出して無罪を陳謝し、それでも疑いが解かれないならば、汝は自害せよ」と教

訓した。若い弥七郎は、5日の夜明け前、清康の乗馬が奔り出したので多勢の者が声高く罵り騒ぐのを聞いて、父が誅戮せられたと思ひこみ、前夜の教訓を忘れて清康を斬殺し、自命も榎村新六郎氏明のため即座にうたれてしまった。



3 松平広忠の幼少の時の難

松平氏の危機

松平広忠は大永6年(一五二六)三河の岡崎に生まれた。天文4年(一五三五)12月5日、守山崩れにより父清康が25才という短命で歿した時、織田信秀は才かさず三河に討ち入り、広忠の叔父松平信孝等の活躍でどうにか岡崎を守った(井戸田の戦い)。が、松平信定が岡崎上の押領を企てたため、阿部定吉らにより、日直忠は岡崎を逃れた。広忠は東条持広の領である伊勢神戸(かんべ)に身を寄せた。天文5年伊勢を出て遠州懸塚に行つた。9月10日直忠は播磨野呂呂城に入るが、その時信定は野呂呂を攻めようとしていた。たけもと岡崎が揺蕩しているのを引き上げた。10月9日に広忠は茂呂を出て駿府へ今川義元に会つた。この間に、岡崎在住の村士は広忠を迎える希望が高まり、大久保忠俊らが信定より岡崎を回復したので、広忠

は岡崎に帰つた。

4 織田氏との抗争

年表形式によつて

天文7(一五四〇) 織田信秀、安祥を落成

天文11(一五四四) 野の所、先鋒となつた水野忠政(刈屋城主)と、和が成立し、忠政の女が太の方(太田康光)が広忠に嫁ぐ(天文11年12月21日家康が生まれる)

天文11(一五四四) 第一回小豆坂の戦い

(起因) 今川義元の三河侵入

織田信秀、今川義元

織田信光、小豆坂土木槍

松平広忠

(結果) 今川、松平敗れる

天文11(一五四五) 松平信孝は織田信秀に通

じる。水野忠政が歿し、嫡子信元が相続

信孝に属する(そのため、広忠は太の方と別れる)

天文11(一五四五) 広忠、戸田康光の女を娶

つた。

る。

天文15(一五四六)

玄忠の叔父、松平信孝は

織田信孝に逆じ、渡理河原で玄忠を破る

信孝は松平忠倫に同族城を攻めさせる

玄忠は今川義元に救援を求めた時、義

元は代償として千代(家康)を入質と

して駿府に来たこととしたが、戸田康光

が千代を奪い信孝に渡す。↑ ↓

の頃、美濃の斎藤氏との抗争激化

天文17(一五四八) 第二回小豆坂の戦い

(逆回) 今川義元が野々山政業によって大

高城を攻めさせる。

今川義元

大原雪斎

副将真行

(結果) 今川方の勝利

天文19(一五四九) 玄忠は逆臣岩松八郎によ

り殺害される。植村新六郎が八郎を討ち

取る。



まとめ

玄忠の時代は親類の時代

松平氏族の有力化 ↓ 宗家の後継力の衰退

⇒ 松平信定・信孝の謀反

人心の離反

今川・織田二大勢力の抗争激中

(参考図)

※現在地名を用いる



庶民の生活—農民中心

工概観

農民の耕地私的占有は荘園制の解体および大名領国制による兵農分離と、太閤検地により法的根拠をもち強固となつた。また、年貢のかわらない新開の畑、領主の水を使用しない田(棚田)を直接切拓き、耕地占有は集約的効肥農法により小規模であつたが自立の基礎となつた。農村は地侍の名主層、一般の名主層、新興小農民、下人等の階層性をなし、惣村の老や年寄衆などを指導者として強固、峻刻なる村塔結合をなしていた。

正農業の四季

○苗代

早春の若葉つみ…公事の調達であり農閑期の生業である。やがて(旧)二月下旬、苗代作り。堰溝浚、畦塗、水引、田打、小草取、初漬、草刈、草敷、初蒔の

順序で行なわれる。

「苗代にとりては、追うべきものあり。すくひ喰ふ小鳥、拾い喰う小雀、なかも踏まは、とおます、のたり廻すは、とう亀、ひすむしが蛙に、畦をもつは、はら虫、彼奴こそ憎い奴。」

○田植 四月下旬〜五月にかけて

まず、神田の田植から、終つて一般農家の田植。鋤と牛を使う代掻は男の仕事なら、草取りから植付けまでは早乙女が中心、そして、早乙女は唄るい田歌をうたう。

「まことの早乙女は、ようはにこそな、声も面白く、ようはにこそな、日さえるれば、よい早乙女の、さ声や、五月早乙女、くればの声は面白、さ声おもしろ、佩いたる大刀にかついで、面白いぞや歌へや、しよ田の早乙女。」

田植は「結」によるもののほか、有力農民にやとられる場合もあつた。

○手入れ

田植直後の作業は稗、おもたか、なま等の除草と水の管理である。

「打ち続けての日照でござるによつて、いづかたにも水がござらぬによつて、すこしも米断のならぬこととござる。……まことに耕作人と申す者は、殊の外せゆしいものでござつて、毎日のように見舞はねばならぬこととござる。」

神仏へ今年の豊作を祈禱。虫害、鳥獣害も大敵だった。粟山子をとたて、鳴子をつけ庵を建てて守りぬばならなかつた。
。収穫・脱穀

「けさなつた鳥の声は、よい鳥の声やれ、田一反に丸石はよいとりの声やれ、よいとりの米八石と、うたうた。」

根刈した稲を稲機で乾燥され、こき箸で脱穀される。脱稈には鶴臼とともに挽臼が使われる。

「酒をつくろう、こみずみ早稲の木をば、酒をしぼろう、柳がもとの清水でし

まづ神に収穫を感謝して、ついで村人で曲作を祓う。それから、二毛作は麦の種まき、三毛作は荒起し。

冬一雪の降つた後は、世なみが良いと申す。来年は田も実入りがよう出来うと存じて悦ばしい。

皿農具・衣・食。

。農具

稗・馬糞・鋤・鍬等前代には月ぼ達成されたものを改良していつた。

。灌漑

水車―足踏の竜骨車が究明されたが、一般には河水をせまとの用水路で導入した。ミニで重要なのは技術面よりも鄉村自身の自主管理に移りはじめた点である。

。稲の品種

しゃうがけひ・ふしくらの稲・目黒稻・ス

ルヘノ稻等、江戸初期までに約十種。

。衣服

一般には麻布、地方では楮・葛布・藤布、日常労働には手細や手無しに四幅袴をはき、あるいは丈の短い手細や手無しを着、細帯を結んだ。胸には腰蓑をつけることもあった。祭り・婚礼・贅入りには肩衣・袴もつけることもあった。

○食事

日常生活は米は少なく、うどん・そば・とうめん・餅・石頭・豆腐。調味料としては塩・酢・味噌。宮座での共同飲食も一たたまごぼう・かや・くり・かきささげ・とうふ・こうじ・いわしのすし・酒の肴として、ゆでまめ・大根・しらびと言う様にその村の格式の高い宮座での御祝の事の馳走でか様な物であったから、日常の農民はなおさら質素であった。
 〔大平記〕護良親王熊野落ちに「在家ノ者共哀ヲ垂テ粟ノ飯、橡ノ粥ナド取出シテ其飢ヲ相助クシよりも、その程度が類推できよう。

IV 負担

○年貢

検注帳や坪付帳により徴収負担額

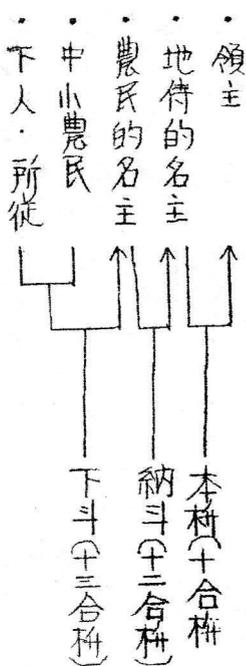
(1) 農民の階層分化による重要性。

(2) 収穫高と年貢額(率)の差異。

(3) 多量の枡の使用により。

奥に多種多様であったが、一般には五〇〜七〇%前後であった。

例として



一般に市場で使用されたのは京枡(十合)

枡)各荘園に私枡(田舎枡)。

この様にして支配者層による搾取のしゆよせがすべて農民にかかって来た。

○公事

・雜公事——古代の調・庸や雜徭類の課役で、本園や山野の産物・家内手工業品に課せられた。

・夫役——労働力供出、公事中最重負担であつたため逃散の原因となつた。しかし、後には代米・代金納となつた。

・軍役——中小名主あるいは作人層を對象とした。これが後代の「足輕」である。

▽祭（三河地方より撰述）

当時の農民の唯一の娯楽は村祭であつた。正月・春の田植祭・夏の虫追い・秋の稻刈後の豊作の祭に彼等の抑圧された来た精神を開放した。

○花祭、十二月〜一月、北設楽郡

南北朝以前よりあつたと云われいてる。「花」の由来として穀物の花を豊に咲かせるように祈る。旧新なる年の更生を祝福する春祭で、そこで、年の初（は

な）の祭と考へられるが、素朴な豊年祈念の年頭神事であつたろう。

また技楽の一種で日本に於ける古い舞臺の遺つたものと考へられる。足踏して悪霊を鎮める陰陽道の「べんばい」（反閨）が舞の主で、これは特別な神事だが後に添加したものである。三河の祭は「花祭」が豊川流域地方に親をかえて広まり、鳳来寺・峰・折立等の田楽を始めとし其の土地の独自の名をもつて、神楽とか何々踊とか称して各地に似がよつた行事が行なわれ、又部分的に祭の行事に加味せられたものが少なくない。

○てんでこ祭

一月三日 御田植祭

熱池八幡神社（西尾市）

清和天皇の貞観元年神々に御供する米を作る御料地になつたのを記念し、又豊作を祈念する祭事として千年前よりおこなわれいてるといわれている。豊作物の豊作を祈る為に大根で男根を祭つた。

○鬼祭 二月十五日

(豊橋市中八丁) 安久美神戸神明社

神世の昔、高天原に座しまあ天照大神の犯へ暴ぶる神が現れて大神にいたずらするのて武神がこれ懲しめる。その結果ついに和解し、国内は平和をとりもどし一同は嬉んで舞をするというのである。神前行事は田楽祭の崩れた姿形とも見るべき行事に雅楽や武家の行事の色々な形が加ったもので、この祭の一特色を存している。 *武家の行事……射的

*鬼祭神事と田楽

喜田貞吉「歴史地理」

1 田師は田楽のシテイという役の言化で、熊野田楽ではシテテンとほつてゐる。

え、笹良見は田楽にも拍技を摺って踊るものがある。

3 島高と赤鬼の争は、武神が邪鬼退治を演ずる田楽能の遺物で、鬼は山人

を表わし黒鬼は山人がすでに帰順して警固の任に當つてゐることを示し、赤鬼は未だ帰順しないものが氏神に退治せられて、土産物を呈して款を返す意味を示したものであろう。

4 御頭様は昔の獅子田楽の技がすたれて、獅子頭のみが遺つて居るものと思われる。

○大提灯祭 八月二十六、二十七日

諏訪神社 (幡豆郡一色町)

色の地は幡豆郡の南端にあつて前面海に臨み、海岸に洲原があり、海魔がこの洲原に上陸し田畑を荒し、人畜を害し其の被害が甚しかつたから村民が集り当社の神前に於いて大篝火を焚き、海魔除けの祈禱大祭を執行した処が、其れ以来其の被害をまぬがれたといふことである。依つて毎年篝火を焚き比の祭を行つた例としたが、人口が増加し、火災の危険等により大提灯を作つて、蘇燈するようになった。——これら虫追門行事の変形したものと考へられる。

。猿投神社祭

旧文月九日

西加茂郡猿投町

棒の手の由来

棒の手は猿投の節句祭に奉納せられた流投であつたが、今日では西三河と東尾張各地で行なわれる。其の始めは、天立二十三年（約四百年前）尾張の岩崎城主丹羽勘助氏次の時加賀の人が城下に住して盛んに此の技を教え、村民競つてえを学んだ。次は此の技に達する者を募り軍装して猿投神社へ詣でたのに始まり、慶長五年丹羽氏が西加茂郡伊保に移封せられてから、同氏の旧領・岩崎村の村民は猿投神社の祭礼の歸りに伊保に立寄り旧主丹羽氏のために領内伊保神社で、この技を演じた。これより近傍各地に棒の手が流行し祭礼には必ずこれを演ずる習慣が始つた。現在では各村に行なわれる棒の手は教派に別れてある。即ち起倒・剣倒・夢想・鎌田の四流がこれである。

起倒と剣倒は尾張の岩崎から伝えた流派が、岩作・高張に行なわれたものだと言われ、更に伊藤伴左衛門と言う者が一派を創め、融和流と称したが今日絶え何時頃、何村に行なわれたかは不詳。融和流から天明午間に西加茂郡宮口村の沢田佐兵衛という者が出て、別に鎌田流を創めた。夢想流はその伝説を詳にしない。この四流共に型を表裏に分ち、合せて三十四種となつて居る。表型は木刀と棒のみであるが、裏型に到つて始めて刃物を用いた刀・長刀・鎗・片鎌・大身鎗・鎖鎌等がある。其の行装は皆同一で、頭に障笠を被り、布草鞋を穿き、胸当てと称する物を着、三ノ帯を結ぶ。

以上名大祭において大体絵で示したものの説明部分を加筆し、又祭については写真の形で展示したものを別個に取り上げた。当時の三河に限定される資料が少なか、たゞ私達の調べた範囲では上に農民の生活そのものの

資料も少なく、また、時間的制約もあつたので、この様な内容に終つた。(bodies of しい身解)

以上、主体性がなく、終始参考文献の文章の丸うつしであつたことは筆者の思考能力欠如の結果であつた。この裏にいつては今後あつたがたの研究に期待します。(池田)

参考。

一向一揆

一向一揆は、蓮如の布教活動を機として一五世紀後半中小名主層が郷村制を形成していった地域に多くの信徒を獲得した。一向一揆が北は越中、東は三河に限る地帯にのみ起こつたのは、そうした理由による。

門徒農民は精神的には来世往生決定の母

心感を得、社会的には郷村を単位とする講・組の団結をもつようになった。講・

組の中核は中小名主出身の道場坊主であり、そのうえに地方的中心として蓮如の一族である一家衆の寺院があり、さらに後者は中央の本願寺に統制され整然とした教団のヒエラルヒーが成立した。また本願寺門徒の国人層が一揆を指導し先頭に立つた。さて応仁の乱後加賀の守護富樫政親は一族の内訌とがらんご本願寺門徒を弾圧したので、一四八八(長享二)年一向一揆が蜂起し、ついに政親を自殺させ、加賀國は約一世紀にわたつて、門徒、国人、農民の代表による合議制の國支配が続けられたのである。

この際農民と共に戦つた国人とて、眞の農民の友というわけではなく、彼等は組織された加賀門徒農民の反富樫のエネルギーを利用して、彼等自身が第二の守護化しようとしたのである。又一向一揆も農民と守護大名を利用して教団の拡張をはかる事情にあり、守護大名が自分達に攻撃の手をのばしたときに反抗し戦つたのである。こうして一五世紀以来活

究化した土一揆、國一揆、一向一揆をへて中世農民の反抗も、より成長の早か。

た戦国大名の出現によつて再び抑えつけられることとなった。

「今日¹五日、越前府中に行く。其以前越前合力勢、賀州に赴く。然と雖も、一揆衆、二十万人、富樫城⁴を取囲く。故を以て、同九日城を攻落さる。皆生害、す

。而るに富樫一家者。一人を取立つ。

〔蔭涼軒目録〕

注し今月 一四八八(長享二)年六月

二十五日

2. 合力勢 加賀の隣國越前の守護朝

倉飯景の援軍

3. 衆 一向一揆の人々

4. 城 富樫氏の居城、高尾城

5. 生害 殺害

6. 一家者 富樫泰高、一揆は勝利後

名目上の加賀國守護として泰高を

たて加賀の國の支配を一揆の手に

おさめた。

。主な土一揆

一四二八 正長の土一揆

一四二九 播磨の土一揆

一四四一 嘉吉の徳政一揆

一四五四 享徳の一揆

一四八五(九二) 山城の國一揆

(白旗を行なう)

一四八八 加賀の一向一揆(富樫氏を滅ぼす)

一四八八(一五八〇) 一向一揆の加賀支配

。発生件数

一四〇一(一四五〇)

応永八 宝徳二

一四五一(一五〇〇)

宝徳三 明応元

一五〇一(一五五〇)

文龜一 天文一九

一五五一(一六〇〇)

天文二〇 慶長五

三十二件

八十一

二十四

二十

合戦の民衆に及ぼした影響

序・日夜をとめず推力支配への闘争が展開

され、強き者か弱き者か全き残る乱世。その中から数々の英雄を見出してきた我々は、ともすれば歴史の一面だけしか眺めていないように見える。戦国の乱世の中でいちはの悲哀を嘗めさせられたのは？

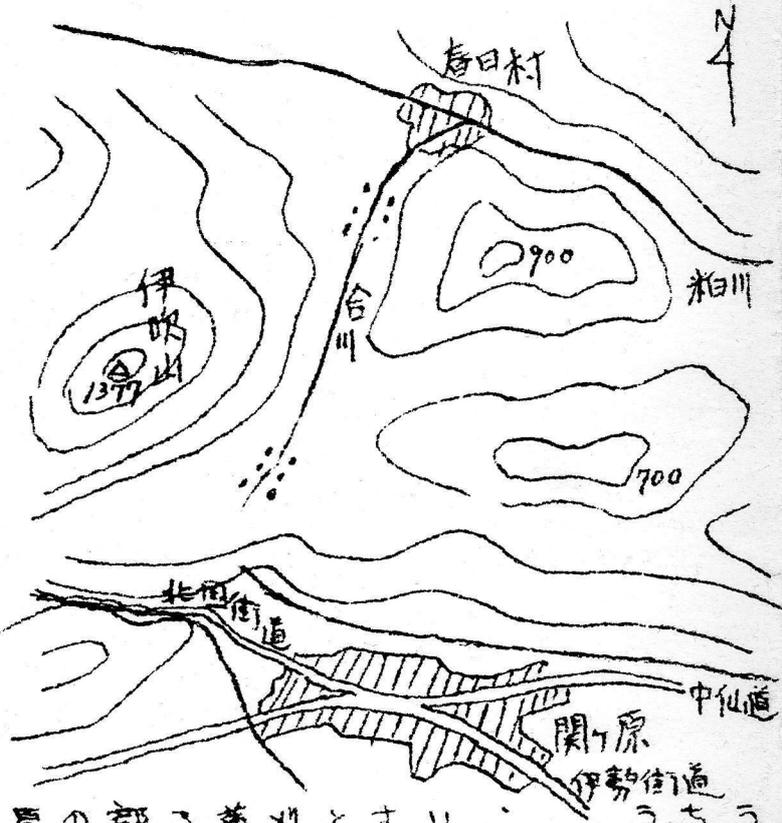
我々は今も大塚原の「関ヶ原合戦」を背景として、末題のごとく、歴史のこぼれをわらうことかたがた。「民衆」というものに焦点をあててみた、実際「関ヶ原合戦」の足跡のうらみでは、このテーマを最も強調した。我々ではあるが、こゝをたゞ単に過去の一事象としてのみとらえるだけか我々であってけなうない。

一 焼打ち

合戦前、八月二十三日、岐阜に降りては城主織田秀信は東軍の猛攻撃の前に降り、

岐阜城はつりに陥落した。東軍部将・藤堂高虎はすでに大垣の西北五キロメートルの赤坂に着陣していた。そして東軍諸将もここに集結し、家康の来着を待っていた。二十六日高虎の一隊は関ヶ原・垂井を焼打ちにした。こゝには民衆に對して、この辺が戦場になるがもし水が干涸びたり威嚇の意味もあつたし、さらに戦術の妨げを除く意味もあつた。大垣攻城にしろ、遭遇戦にしろ佐和山城進撃にしろ、関ヶ原一帯は非常に重要視するべき土地である。故に戦術の妨げとなるような民家等は早くから取り去られておくべきであつた。

とこゝでモメとばつちりを受けた民衆（農民）はどうしたであろうか。一部の農民、特に若いものは、軍役にかり出されて、輜重（しりゅう）として動いたことである。大部分の農民は北方谷川の谷をのぼつて春日村へ逃げたであろう。こゝをたゞを領地に持つてゐる竹中家（東軍方）の家族も春



日村に疎開している。(竹中家古文書)
 また合戦後・伊吹山系春日山中に逃れた小
 西行長を訴人した者が、関ヶ原の住民・三
 輪林蔵主という者であった事から容易に
 推測される。そして合戦後になっても、「
 早く村に戻って農作業をするように」とい
 う

う融氷が出せぬところから農民た
 ちはなかなか村に帰ってこれなかつたよ
 うである。

三 合戦当時

ここでいちばん注意せねばならぬのは
 我々が九月十五日に合戦があつたとして
 いるのは旧暦によるのであつて、新暦に直
 すると、これが十月三十一日になるというこ
 とである。すなわちこの地方では丁度稲の
 刈り入れに入らんとする頃であり、田には
 黄金色の稲が重く穂をたれていたことであ
 る。領主の竹中家は、この年玉・山中の
 部落(関ヶ原中心部より少し離れる)から
 の年貢はわりありにあつた。たよるだが、関ヶ
 原中心部からの年貢はなく、家康が領地
 を荒したとして、戦後一〇〇石の米を賜わ
 った。竹中家ではこれによりさつとく岩手
 の館(魚井町)に塚をつくり「十石塚」と
 名づけた。(竹中家古文書)

三 合戦が終ると一部の農民は野盗と化
 し、落武者の身につけてける物を奪取つ

たり首を落して恩賞にあずかるという事は
当然考えられる。

ところで民衆への救済はどのようであつ
たろうか。竹中家も、直接的、間接的に救
済を行つたであらうが、史料が全くなく
さうばかりわからない。ただこれを機に関
原中心部の都市計画はかなり助成を与へ、
これが後年宿場町としても栄えるようにな
つたのであらう。

結

はじめはなんとかこれを皆に強くア
ピールしようと思つたものの、次第にその
意気も薄れ、結局、この程度の事しかでき
なかつたというのはなんとりつても指し
。はじめから予想さ小つたこととはいへ
史料収集が全くはかどらず、すべてをこ
に帰せるのは我々の不勉強さをかくすもの
かもし小ない。この内容は、元関ヶ原郷土
館長不破幹雄氏とのミーティング(五月二
十六日)の際に不破氏よりうかがつた話を
主にして、我々の私感を加えたものである

か、その話のもとになつた「竹中家古文書
」を我々の目で確かめたかつたものである。
しかし、史料の少なさは逆に、りかに民衆と
いうものが見捨てられ、さうに見送されてき
たかという事を我々の心に強く感じさせ、こ
こにこのテーマの意義を感じたことは、我々
に共通したことである。

一坂本一



武將と旗指物

今展示会において我々は、関ヶ原合戦の
展示に花を添え、色とりをつけてる意味にお
いて関ヶ原合戦の主なる武將九人の旗印を
つくり、会場各所に展示した。

我々は一紙に旗指物とよんでいるが、こ
の名は総称的なもので、個々のものに旗、
馬印、番指物、使番などがあるが、我々の
言う旗指物というのは旗のことである。各
々の説明は省くことにするが、馬印（うま
じるし）とは馬駿とも書き大將の馬の前、
刺などにつけてたものである。旗指物の発展
もこの合戦以後大きな戦いもなく、この頃
がピークであったが、その目的とするところ
は各々の部將の存在を示すものであつた。
しかし、写本兵要録口義田にもみられる
ように、「あまりめだらすぎては集中攻撃
の目標になつてよろしくなけしのである。

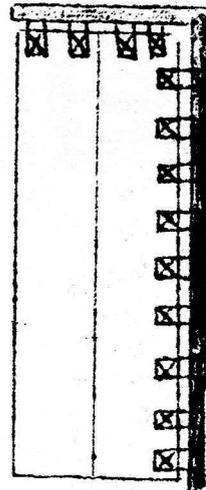
他に旗指物心得として、「風に鳴らなりもの
し、しなうもの、たたしなりすまると風を
ふくんで重くなる」などと書かれていたが
、結局は「頑強なものがオ一、風雨に耐え
、廻打ち、莖馬にも破損しなれもの」とい
う事が胆要であつた。

我々は、これら旗指物について高橋賢一
著「旗指物」、歴史読本（昭和四十二年十
一月号）、さらに関ヶ原郷土館保存の「関ヶ
原合戦図屏風」等を参考として製作したの
であるが、各々文献により武將の旗指物は
かなりちがつてゐる。しかし、現在の我々
にとつて各々の武將がいかなる旗指物を使
用したかを考証することは、必要ではなく
、合戦図屏風における旗印を適當であ
るといふ意見で我々は一致し、三月末の
春合宿、五月二十六日の関ヶ原見学会にお
ける郷土館の合戦図屏風の写真、スケ
ッチを参考として製作を開始したのである
。又、さお、乳（うし）、旗の寸法・縮尺につ

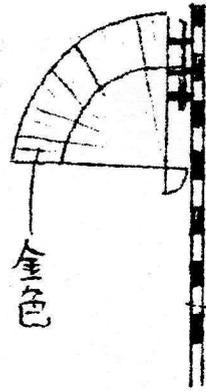
りても考証を心要せずと考へ、たゞたりの
 際にて中二十五〜三十cm 丈で九寸〜一〇cm
 程度の旗を製作したのである。たゞし、こ
 れらについて曰井伊家軍法曰井伊家備立
 の記には、かなり詳しく述べられており
 その一部を次に記す。「一、自分の大旗は絹
 二幅、長さ一丈。……………一、馬上の上箱
 二幅長さ五尺……………し なが乳とは、
 竿に旗を通すためにつけた小さい布製の輪
 のことである。
 次に各部將の旗指物につけて、それぞれ
 図示説明する。

徳川家康(東軍)

小坂長久寺の戦までは白地に黒い葵紋を
 たてに三つならべた旗を使つていたが、そ
 の後は大方・総白の旗を使用した。源頼朝
 が「無紋の白旗」を最高位においたが、家
 康も又、紋にあやかろうとしていたのでは
 どうか。有名な「厭離穢土・欣求淨土」の



旗は、この合戦には使われなかつたが後に、



金色

大阪の陣の際には大樹寺住職直筆のこの旗を箱に入れ持参したところから、家

康自身かなり大功にこの旗を扱つたようだ。又彼の馬印は金扇大馬印として有名である。

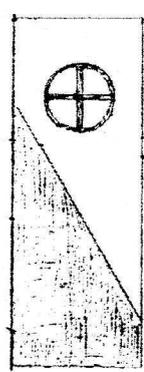
石田三成(西軍)

大一大吉
大方

「鎌倉武鑑」に石三為久の紋としてこの

紋が使われており、三成も又、この瑞祥的な文字を用いている。むかし大一大吉、大吉の位置は家紋、旗等により異なっている。

島津惟新(西軍)



十字を用いたことでは島津氏は古りが、丸に十の字の家紋が整ったのは、徳川時代に入ってからとみられる。それまでは算盤をもつ十の字であった。たはこの十字がキリスト教の影響のなりこは明らかである。

井伊直政(東軍)



「井伊の赤備え」として赤で非常に恐

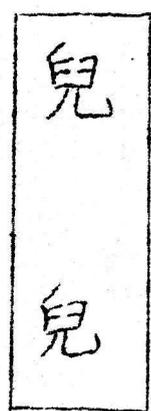
丸に直政を中心として編成され、武装のすけずみまで赤色を用いられた。これは家康が甲州山梨の景の赤を見つけてかと思いつき、武田滅亡後、残兵を重用して井伊に実現された。

福島正則(東軍)

賤ヶ岳七本槍の時に使用されたのが、紙の切れじなりの指物であるが、合戦四屏風には、白地に黒で七五桐紋かつけられていま



宇喜多秀家(西軍)



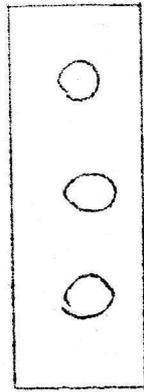
青地に白字家紋の「兒」を二枚を使っている。



小西行長(西軍)



大谷吉継(西軍)



小早川秀秋(寝返り)



脇坂安治(寝返り)

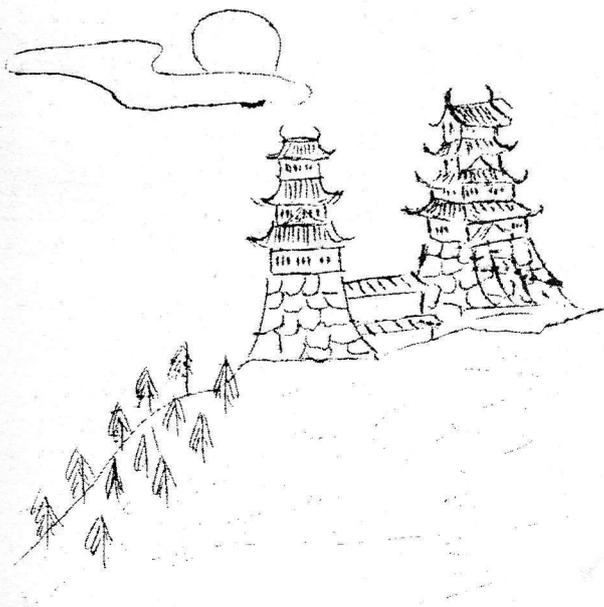


本多康重(東軍)



立葵紋

塚本



白地に黒で
違鎌紋

白地に黒で
家紋の
輪違り紋

武器と合戦形態

一般の野戦の形態は応仁の乱のころから大きく変化した。

うち続く戦乱に戦闘員が激増して乗馬の供給にこと欠き又様々な地形に応じて行動せわばならなかったこと、長柄が流行して鉄砲が取り入れられたことなどにより従来の騎馬戦、個人戦、腕力戦から歩兵戦・集団戦、知能戦へと変わっていったのである。そして集団戦においては、隊は前から「鉄砲組」「弓組」「長柄組」「武者」の四段に構え全体的な動きは、見鐘、太鼓などの合図によって指揮されるようになった。

		戦死者数	戦傷者数	戦傷数	刀剣	矢	槍	礮	鉄砲	不明
1467. 9. 13	京都 一条高倉	1	10	12	0	2	6	0	0	4
1552. 8. 23	備前 瀧山城	7	156	160	4	98	31	27	0	
1563. 9. 10	山雲 白鹿城	5	44	44	1	5	0	5	33	
1600. 8. 24	伊勢 津城	75	227	262	1	36	82	0	143	

関ヶ原の役において最も多く使用された武器は「鉄砲」であった。上の表からわかるように一五四三年に伝えられた鉄砲はまたたくまに全国に広まり、合戦における主力武器となっていたのである。

(たゞ勝負を決するのは刀や槍をひきさげた騎士同士の間である。長柄隊(長柄隊)の働きも見逃せないものがあるが。)

鉄砲

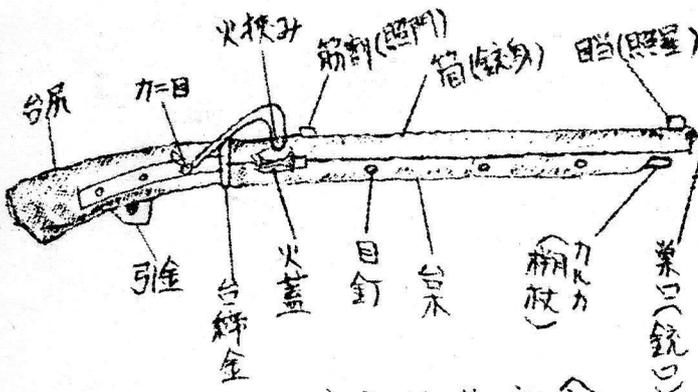
〈伝来・伝播〉

「天文八己亥年八月廿五日南蠻の大船一艘
 隅州の南なる種子島（夕陽ヶ島とも伝）の
 西村小浦に漂着す乘る所の賈人百餘人也其
 形類なし浦人出てりつくの船と問へとも
 言語通せずしてせんかたなし因て西村の司
 はこれを告る時に明國の儒者五峯とりふ者
 同船して来りけるし」

この五峯と西村の主宰・織部丞（おりのじ
 よう）との筆談によつてはじめてコミュニケ
 ーションが成されたという。

西暦一五四三年十月五日のこと、この時
 はじめて鉄砲が伝へられた。島主種子島時
 堯は二丁の鉄砲（火繩銃）を買い入れ、こ
 フそく家臣に命じ製法を学ばせている。翌
 年一応その模造に成功したが、銃身の底を
 ふさぐらせん型の鉄栓の製造にどうとう苦
 心したという。

やがてこの西地から急速なラッパで全国
 へ伝わり、ていくことになる。近江、国友村
 や肥前（宇戸）、豊後、薩摩（棒津）など九
 州方面でも素んに鉄砲の製造が行なわれ
 ようになり、鉄砲の合戦における戦術的役
 割はますます大きくなっていくのである。



（分式・大きさ）
 方式は前装（先込
 め）滑腔式で弾丸
 は用弾を用いてい
 る。火薬には火繩
 で点火した。
 *前装は火薬、
 弾丸を銃口の
 方から装填する
 方式である。

* 滑腔式銃身の内部にネジ切りをして
なりものをいう。ヘレン

大きさは七〇cmくらいのものでヤ一ニ〇cmく
らいのものなどいろいろあるが現在種子島
家に残っている当時のものの寸法は：

口径 一六ミリ

銃身の長さ 七一八ミリ

銃身肉厚 二・五ミリ

である。

〈発射のしくみ〉

引き金をひくと……火繩をけさんぞいの
部分（火接み）がバネ仕掛けで火皿の中に
落ちその中の火薬を発火させ、その火を火
皿の底にある小穴を通じ銃身内の火薬に導
いてそれを発火させ弾丸を発射する。

（求戦の火皿を切る）

〈火薬〉

硝磺（煙硝）と呼ばれ硝石・木炭・硫黄
の三種を混合して作った黒色火薬の類であ

る。混合比は一般に硝石七・木炭二・硫黄
一であった。

* 黒色火薬の爆発範囲……硝石四〇・五八〇%

木炭一〇・五四〇% 硫黄一〇%

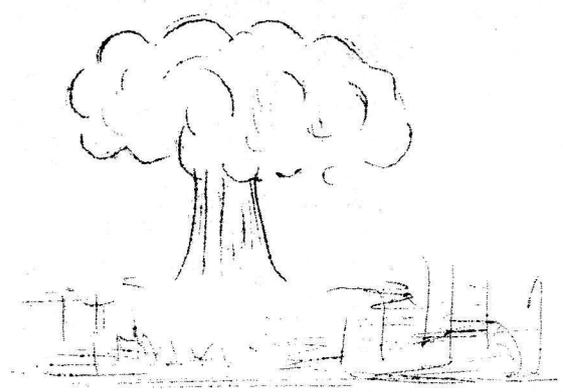
* 黒色火薬の最大威力の混合比……硝石七

五% 木炭一五% 硫黄三三・三〇%

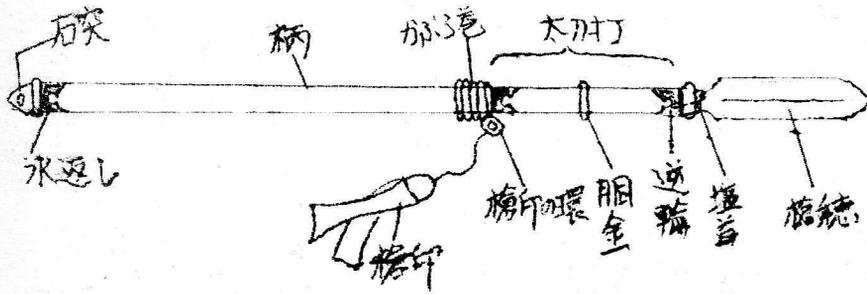
なお硝石は最初のインドやシヤム方面から

盛んに輸入されていたが後、国内で産する

（製造する）ようになった。



槍



関ヶ原の役にありて
 鉄砲の次に多く用い
 されたのは槍である
 この関ヶ原の役に
 槍で名を著したものは
 浅井昭の槍、上田
 の七本槍、日向邊々
 槍の六本槍などがあ
 る。

柄

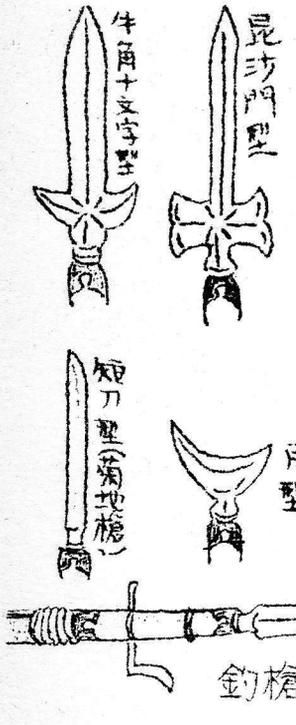
天草槍、赤槍、ス
 ギなどの目の通った
 材料を用い、丸型、
 八角、十六角、削り
 かけなどとし表面は
 木地、黒漆塗、皆味
 青貝すり、干紋巻き

などで仕上げた。

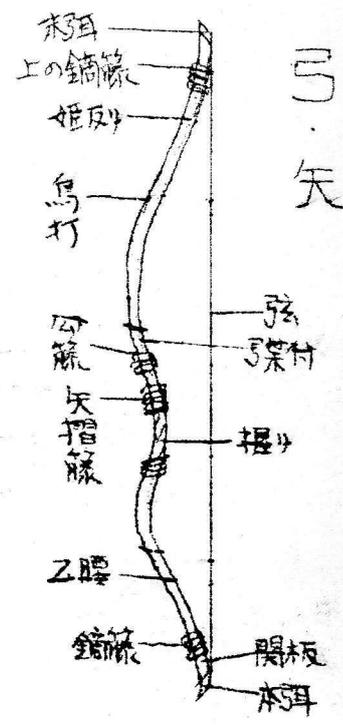
柄の長さは四尺(杓槍)一六尺(手槍)
 九尺・一丈二尺・一丈五尺・一丈八尺(長
 柄)などがあり、手槍は主に武者が、長柄は
 足輕が使用した。

へ種類

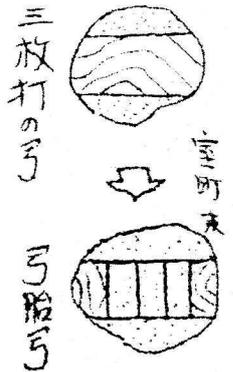
「素槍」とりって両刃でまっすぐなものが
 普通だが、相手の得物をかきまわすため
 に横手と刃を出した「十字字槍」、鳥の翼
 のように左右に張った「鳥型」、その他鎌形
 月形など数種ある。



弓・矢

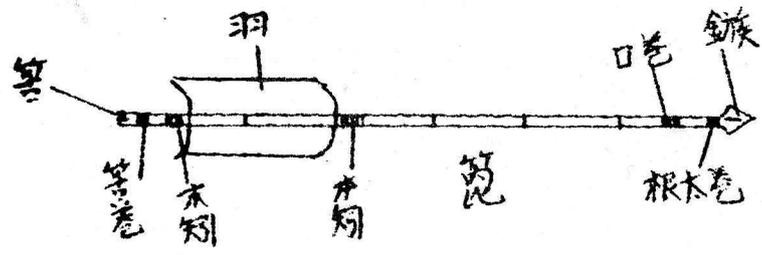


今の断面



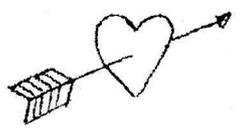
鉄砲が採用されるようになってから今までは鉄砲の弾丸を装填する筒の補助をするだけ

けの存在となつてきている。
 射程は一〇〇mに及ぶものもあるが有効距離は二〇〇〜三〇〇mである。
 (鉄砲の有効距離は八〇〇〜一〇〇mであった)



矢

矧(の)……シノダケが普通用いられるが、ヤナギ、アシなどとも使用した。
 羽……(我回では)ワシ、タカ、ツル、コウなどの羽を用いている。



刀

戦国時代に入ると刀剣類の需要が急増し、日数打ち止と云われる粗製濫造品が多々出まわった。

また鉄砲と長柄の活躍の前に意気消沈したかたちになつてしまつていた。しかし接戦となつた時にはやはり刀や槍(手槍)をもつた武者たちの活躍がものをいうのであつた。

やがて天下が統一されるにつれて「新刀(新刃)」とよばれる堅牢なものがつくられるようになり、良質の南蛮鉄を輸入して、堅牢な革な美術性の高い刀剣もつくられるようになったのである。

文献

戦国武家事典

鉄砲伝来記

一 彰 浦 考 和 一

合戦場の

小荷駄の群

空前の雑踏をみせる佐和山で、とりわけ人馬の通行を妨げ、凌辱をさせたのは、際限もなく混雑する小荷駄の群である。

小荷駄といふのは、徒軍の将士が軍旗や陣陣のために用意される日用品その他一切の荷物であつて、駄馬の背に乗せ、行く先々に運んだためこの名がある。

戦勝の家康には、後を託た小荷駄の版張が余りに多量にあり、お茶の騒ぎのように思ふたのであつた。こぼる機嫌を損じて見定められたのである。

関ヶ原合戦の兵力は両軍で十五万とか、

二十万とか、通例常識的に當然と概算されがちであるが、これとて小さい小荷駄運が、その他のいわゆる兵装のために要す

る役夫を含めての推計である。しかも、
軍の編成にせめる兵站要員つまり勞務者の
比重が思ひの外に大きかつたのは、佐和
山の小荷駄がら見ておもしろいのである。この
事實は期せずして、関ヶ原で實際に檢査し
ごき、剣を抜き、あるいは銃を構えて、命
を奪ひあつた武士の数が、果してこれだけ
あつたか、問題には興味以上の意味がある
と考へられるがゆゑに、あとでいふやうしく
あしく検討することにしよう。

それとは別に戦国武士が出陣に際し携行
する小屋かけの道具とか、陣中の調度品と
か、いろいろの小は彼らの日常生活か、どこま
で戦陣に持ち込み小はか、具體的には小荷
駄の内容をそのものか、ここでの関心事なの
である。

參考までに井伊直孝が大坂の陣に出陣す
るために用意した荷物の目録を見ると、鋏
鋤、鶴のし、オサカリ、かま、なれのこ
き、教白提の杖、用具から、数人前の「御井三

し、御行水桶し、幕、さては教荷の酒樽、
味噌、しやう油樽、塩かます等に至るまで
三十余品目に及び、しかも小は大将直考
の身よりわりの準備をみだり用品つくり
小荷駄をつたのである。この際特に注意す
べきは、こゝろの荷物を運ぶため百二十一
人の人足が徵用されたことである。家為以
下の二級者こそが身分に依りて、それ水が小
の小荷駄を用意したりはつらうまでもない、
こゝろ大坂に出陣したとき力天劍であつて
、直接関ヶ原には関係はなかりか、有力な史
料である。

小荷駄という一見、おもしろい旅支度とい
ふ命をかける心の緊張にあらうす無時時選の曰
を待つ旅旅の生活感情かこめらる小て、たり
であらう。

行さといは兵站は戦争にはかかせない
前線条件ではあるが、戦場では兵を勝利を
ちがひるうが、士の命令である。たか兵站
の生産者や担当者はつねに歴史の幕裏にか

くれて、苦勞を重む、小荷駄は遂に戦場の
邪魔となりてあり、在。関東方の軍が、織田秀
信の岐阜城を抜いて前進すると、城下の
街に混雑し、たのは敗走する敵兵よりも、折
り重なって二進も三進もつかぬ味方の小荷
駄であつて、黒田長政は先陣を率う諸部隊
はこれを避け、わざわざ遠回りして前進さ
る有様であつた。小荷駄はそれほどまでに
軍の行動を妨げたが、またそれほどまでに救
か多く大量死つたのである。まして戦いに
勝ちさえすれば小座かけと食料の入手に欠
く心配はなかり、だから南戦の段階ではこれ
も小荷駄の可否などには、着せず、道を塞
げはたしう踏み越え、蹴散らすてして二無
二進するばかりである。小荷駄はいつい本
隊の後方でもこつき、ときには途方に暮れ
なければならなかつた。

そしてさきほどの問題であるが、推進し
た大阪方の前線兵力三万のうち、その三分
の一にも当てる一万を、戦闘力のなり役夫

と報じた。その数は勿すまじいなりかとい
つた意見があるが、もし知れなかつたが、敗走した
島津家の「関ヶ原衛合戦秘談」にはむしろ
反対の比を示す三分の二が役夫であると言
つてある。けれども、過大の数はいふに
のである。両軍合わせて十五万とが二十万
とがいわれているが、それ以外に救の役夫を
加えたものと考へる小よう。

慶長の軍役の定めによると、このも十
万の場合、騎馬五十頭と人夫五十人を基準
とし、騎士百七十人の用具や甲冑を運ぶの
が主目的であつて、それ以外に三騎に一駄の割
り合ひを目安にして、この定めは最低限を
指示してあり、騎馬の数が個人的な
支度をするのに不ぞうく格別な制限は
なく、騎士以外の一般武士であつても身分に
応じた支度を身につけるのが実情であつた。

関ヶ原の兵力を考へると、方三十万の
かりの関ヶ原で、実際に死闘を演じた相手

名大祭 とりくみ経過

3月23～27日 春合宿（於関ヶ原）

名大祭参加決定。

内容『徳川家康』

- 。関ヶ原の合戦立体模型・写真
- 。松平時代及び家康竹千代時代
- 。当時の民衆の生活（農業・狩猟生活）
- 。ワラジ紹介コーナー

4月20日 関ヶ原「松平」民衆の生活に

グループリ分け。各グループ5～6名。

*これ以降 内容の具体化と参考文献
さがし。

4月27日 名大祭展示を6月8・9日の二

日間と決定。

*この頃、展示の原案決まる。

5月1日 松平奥地踏査行なわれる。快

晴の下、悪戦苦闘。大給城、松平城

・高月院止。

5月4日 松平班、構造発表

また、5月末までに名大祭の原稿をまとめるようにし、6月6日(木)合宿を決定。
*この後、図書館などを利用して、調べを進める。

5月15日 予算案作成。

なお、5月10日(金)以降、5月末まで金曜日にも部会をもつ。但し余りやることなし。

5月18日 三班の展示内容、展示方法について、全員で検討する。

- 。効果音……「ふるさと紀行(東海テレビ)
- 。関ヶ原or三河関係の作品の音を流す。
- 。ワラジ紹介……白川郷
- 。観光案内……松平

5月22日頃 農民の生活証、展示内容及び方法についての最終案決まる。名大祭から

の予算支給総額3千円となり、現物はすぐつけとる。

5月25日 展示物 書き始める。

○関ヶ原……日本地図、関ヶ原地形

○松平……松平氏系図、松平町地図
○民衆の生活……当時の農民の生活

因

県大(地理歴史研究会)の応援・meeting

5月26日 関ヶ原実地踏査

30日 東海テレビへ「さくらと紀行」
テープ複写依頼。

6月1日 名女大(郷土研究クラブ)の応援

2日 三河一揆の寺、実地踏査

3・5日 部会

6・7日 名大祭のための合宿(資

徳彦寺)。展示予定教室で作業。

8日 点滅式立体模型の完成に午間

どり、午前11時過ぎより展示開始。

名女大、県大の人達みえる。午後4

時半まで展示。以後コンパ(講堂裏)

ファイアに参加。

6月9日 展示。午前10時より午後4時

過ぎまで。盛況のうちに幕をとじた。の
ち、コンパ。(片山さん・津坂さん、みえ
る。) 名大祭全学フェスティバルを見る。

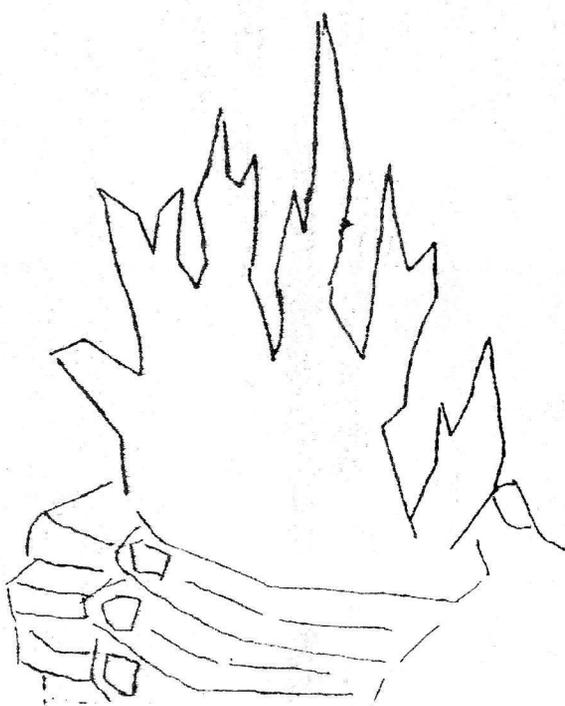
*

6月15日 雨の中、豊田講堂横にて、名大祭
の反省と後始末。

名大祭のまとめをつくることを決定。

6月22日 新テーマ『名古屋―歴史と文化』

決定。新たな活動へと前進。



名大祭の反省

例年の如く今年も名大祭が六月四日より六月九日まで六日間開催され、我が郷土研究会も日常活動の発表、確認の場として積極的に参加し、本特集号の他面でも述べる成果をおさめたわけである。そこで、今年の名大祭の反省、それはとりもなおさず、来年への前進を意味するものであるが、それを書記ノートをふり返りながら述べてみようと思う。

㊦準備に関して、

㊦ 関ヶ原の模型が非常におくれ、飾り付けの日までギリギリであった。少なくとも模型には二〜三日の期間がゆるむのと覚悟せねばならない。

㊦ 女子大学名女大・県大の応援は、こちらがある程度準備をしておき、何を

どう手をとってもらおうかということを明確にしておいて来てもらわねばならない。

㊦ 全体に研究事項として資料が少なすぎて、調べきることができにくく、非常に心残りであった。

㊦前日の合宿に関して

㊦ 各自の分担した研究を事前に発表し、その誤字、文章の誤りなどを指摘し合い直し、たのは大いに良かった。

㊦ 総体的に有意義であり、来年も行うということにはほぼ確実。

㊦展示に関して、

㊦ 日本地図が天井にはってあったが、全然目にふれず、失敗であった。

㊦ 配置、その他、全般にこれといった欠点はみられな。特に写真も多く、絵なども描き、文字を少なくして見易かった。

㊦関ヶ原研究班における展示上の反省

㊦ 模型の置かれていた場所をもっと広くとるべきである。

(6) 特にこの研究班は今年の名大祭におけるメインイベント的存在で、模型、写真、絵……等と変化に富んで非常に良かった。

(7) テープレコーダーの音楽は、一考の余地がある。今年の場合、ふるさと紀行のナレーションを流したのであるが、見る人は断片的に耳に入れるのみで、余り効果がなかったのではないだろうか。

(8) 三河の一向一揆及び農民、民衆の生活班における反省。

(9) 調べた事を発表するのにどういふふうに説きおこし、問題を進めていってしめくくるか、その表現の上で非常に苦労した。

(10) 特に民衆の生活では具体的資料が不足して辛かった。

(11) パノラマ式の彩色画を並べた絵は展会場全体にアワセントをつける意味に

おいて、人々の目をひきつける意味において、見易さにおいて、非常に良かった。

(12) 展示の順序が、三河一向一揆それから民衆としてあったが、一向一揆の方は文字が多かったので、説明しなければ読まれず、絵の方に目が行ってしまった。展示の順序に問題があるのではないか。

(13) 歴史の動かす真の力ー民衆ーこれを忘れずにこれからも研究していく必要がある。

(14) 松平研究班における反省

(15) パンフレットは非常に良いものであった。

(16) 案内の机の置き場所を考えてみる必要がある。

(17) 登場人物が多すぎて、誰が何をしたかというところが微に入り、細をうがつまで理解できなかった。

(18) 系図の置き場を考えて説明している途中に適宜それを指し示してその人物の位置付けをはっきりさせた方がよい。

(19) ワラップ紹介に関して、

(4) 女性が多く見ていた。

(5) 写真とか、地図に目がゆき、やはり文が読まれていない。

④ 宣伝に関して、

彩かなサイヤ調の看板など、とにかく人目を引くよう工夫され、なかなか牙えていた。

⑤ 総括

(1) 時代が前後した配置及び研究課題であつたので、説明がしにくかつた。

(2) 最初の関ヶ原に注目を集中された感じ、他の方は素通りという人が多かつた。

(3) 乙番教室という場所が悪かつた。来年はこちらから25番教室あたりを希望できないものであろうか。

(4) 少々一般向きに程度を落とした？ こともあつて全般的にわかり易かつた。しかし、全体的まとめりとしては、欠ける所もあつた。

(5) 3つの研究グループに分けたのは成功した。

更に部員増となる今後の方針としても、このグループ分けで行く方が適しているのではなからうか。更にその分けたグループ間での互いの研究テーマに関する話し合いをめん密にして、もっと知り合うようにしなければならぬ。

⑥ 来年への期待をあけておこう。(あくまで思いつきの参考意見である。)

(1) 実物を展示する。

(2) 部員がそろいのユニフォームで働く。

(3) 歌声喫茶、模擬店への参加。

(4) 名大祭の為の研究に終わらせず、それを論文集という形で発行する。

(5) 映画の上映 *自分達で8mmで作ったらどうか。

(6) 模型を今年の点滅式から更にリモコン式にまで発展させる。

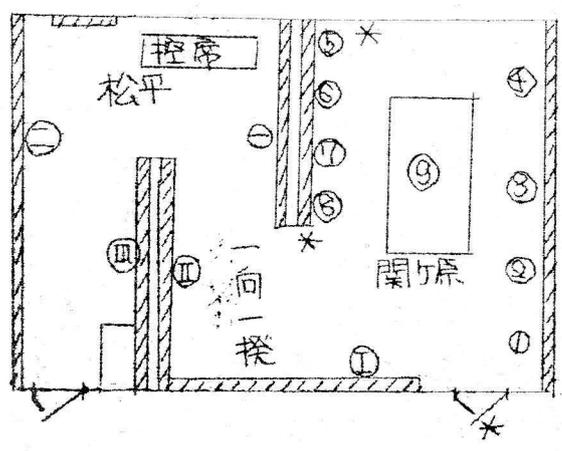
(7) 民謡、お祭の実演

(8) 名大祭中展示に興味を持った人を集めて、

一緒に現地へ実地踏査の形で行ってはどうか。

(1)講演あるいは話し合いをしてはどうか。
 以上で名大祭における反省をおわります。

〔教室の配置〕



(郷研書記局)

教養 12 藩教室

関ヶ原の戦い

- ①合戦の民衆に対する影響
- ②拓本
- ③関ヶ原合戦因屏風と関ヶ原の史跡
- ④小荷駄
- ⑤弓矢、刀
- ⑥槍
- ⑦鉄砲
- ⑧いくさの変遷と死傷者の実際
- ⑨関ヶ原合戦の経過を描く

点滅式合戦立体模型

*旗指物

天井に諸大名の領国を描いた
 日本地図

一向一揆と農民の生活

- ①一向一揆
- ②農民の生活

松平氏の発展史

- 親氏～信光の時代
- 清康～広忠の時代

④ 777 紹介コーナー



一年間の活動と反省

我クラブの活動について反省をするのであるが、それは昭和四十二年十月から昭和四十三年九月までについて考察することにする。反省の形態には色々あるだろうが、筆者の都合の良い方法を取ることを許していただきたい。それはできる限り客観的立場から観るべきものであるが、住々にして主観的になりやすいし、筆者が役員であったことから、思っている事を自由に発表した方がうまくゆくと思つたからである。

一、研究活動について

我がクラブは当時十数名の部員で構成されていた。その部員各人の興味対象を合むような統一テーマを決めて、クラブ全体として研究を進めようとしたのは四十三年の七月である。このテーマ決定に相当長時間を費し、九月に入つてようやく徳川家

康に落ち着いた。方向は家康を中心にして彼の活躍した時代とその舞台となった尾張、三河地方の民衆、地域性を探究しようとするものである。具体的には家康の生涯を追つてゆく時間の流れに従つていた。その結果、郷研の一つの領域である、歴史研究、つまり中世郷土史的色彩が濃厚になつた。このことは最後まで続くことになつたが、この方向に対して部内にも多くの論があることはやまえない。研究体制であるが、家康の生涯を四期にわけ、カ一期 出生と桶狭間の戦い、カ二期 幸吉統一、カ三期 関ヶ原の戦い、カ四期 夏の陣、冬の陣、各期毎に一回は実地踏査に出かけることとし、各期を四々五人が担当して毎週土曜日の部会に一人二三人の研究発表を行うという形をとつた。原則的には時代順に発表することにして、各個人の研究テーマはその期内における事件について自由選択であつた。そしてその探究方向、調査方法、資料

選択は個人の自由にした。結果的には年代順にうまく埋めていくことになってしまった。取り上げられたテーマをら列すると「松平氏の起承」「家康の出生と竹千代時代」「信康時代」「桶狭間の戦いの問題点」「一向一揆と三河の統一」「徳川改姓と三方ヶ原の戦い」「長篠の戦い」「本能寺の変及び山崎の合戦」「小牧・長久手の戦い」「関ヶ原の戦い」以上である。この方式のよい点はその割りあてられたテーマに対してどんな態度で臨んでもよいので各人の個性が生かされることである。しかしこの点がどこまで実現したかはなほ疑問であるが。また研究を進めるといふ意味ではすくなく能率的であったことも確かである。しかしながら研究発表が一回限りであったことや、発表する人と聞く人の間に相当知識の差ができるため討論が消極的になったこと、発表内容が通史的なものとなり、表面的な紙花的なものとなつたことは大なる失敗である。その原

因は割あてが非常に遅れ、二、三週間前にやつと決まるといふ不始末のため、又発表内容のコピーが渡されなかったことがある。コピーの件は後半になって改められたが。全体的に発表内容も教科書的になつていた。これは本の引用が大部分を占めていたからである。このことは名大祭の発表においてテーマを絞つて再度取りくまねばならなかつた原因でもある。奥地踏査はそのような弊害を無くす為に行なわれたものであるが、多分にハイキングあるいは見学旅行に終つてしまつた感がある。今まで述べたような研究方法は三月の春の合宿まで行なわれ、四月以降六月までは名大祭のためにテーマに沿つてクラブを三班に分け、その班内において研究を行なつた。発表は班内で行ない、クラブ全体としての発表会は行なわなかつた。班内の研究も、一人が一項目を調べるという分業が行なわれたが、期間的に長かつた上に、互いに密接な関連があ

ったため、討論もかなり活発化したようである。しかし、本の引用が多く、まだ独自性がないように思えた。我々の研究活動は六月で終わり、七、八月は休暇状態に入った。我がクラブが実際に研究活動に乗り出したのは、この年が初めてであり、一種のテストケースであったことにはちがいない。しかし、見通しの甘さがあったことも又事実である。我々の活動が時間的に例えば冬休み、春休み、期末テスト、などで大きく制約を受け、計画倒れになってしまったものもいくらかあった。その上、クラブの性格がかなり曖昧であり、部員全員が各人クラブ像をばきり持てなかつたことも又事実であろう。我がクラブの宿命として、窮極には研究は個人研究の総合という形をとらざるを得ない。これは、構成員の興味対象がそれぞれ異なるに、クラブがその要求をすべて、最大に満たそうとする限り必然的である。したがって今後個人研究の行ないやすい体制をつくり、発表形式も工夫する必要がある。

よつと思われる。この年の研究活動は低調であったが、我々のクラブの発展段階における一過程であるという位置づけにおいては有意義なものであったと思う。

二、合宿とクラブについて

春合宿は三月二十四日と二十七日、関ヶ原妙心寺で、夏合宿は八月二十九日と二十九日、長野県北国街道。具体的な日程や行動記録は省略する。春と夏の合宿は性格を異にする。春は、研究の一環であり、関ヶ原、奥地踏査も兼ねていた。そして、宿所を決めて、そこで研究討論を行ない、今までの総括を行なった。夏は自然に親しむことが目的であり、テントをかついで旅行する。一カ所に部員の親睦をはかることもあり、特に新入生がクラブに馴染むいい機会なのである。目的は観光地ではなく、歴史的風土のある所が多くもりこまれている。この年の合宿は以上述べた意味においてはまづ成功だったと言える。又合宿の計画

は最下級生が担当するようになった習慣になつて
いる。「これは親睦」という意味が強くなり
出されている結果である。春と夏において
異なることは、悪いことではない。しかし、
研究活動が夏には終わらせざるを得ない
きつうとしてなほある。毎週議題につ
いて約半年で終つてしまい、新しい課題
をさがす。つまり継続研究がないのであ
る。この点については多くの論がある。そ
の論評はひかえることにする。春夏の合
宿の他に、名大祭準備のために一日合宿
を行なったり、絶対に親睦を計るため合
宿を行なつた。これは日頃部会では個人
的な話し合いが少ないためである。しかし、こ
の年においては、部員間の意思交流は少
数という利点も手伝つてうまくいったと思
う。クラブも開られたが、回数は四回
程であった。ワラブの機能には二つあると
思う。一つはワラブ自身が目的として
掲げている所の、我々においては郷土
に対する研究活動である。これに對し
ては今後幾かの議論を行ない検討して

やかねばならないだろう。他にどの
ワラブにも共通の所である。ワラブ
員間の人間的交流と向上である。「こ
の機能がマヒすればもはやワラブの
存在は無意味になるだろう。この点
において我がワラブは、先に述べたよ
うにかなり満足すべきものがあつた。
これは少数であることもあつたし、
どちらかといえばこの方に力を注い
だからである。今のワラブの零(曲)気
というものはいつまでも残したいと
思うのである。

以上重要項目について考察を行なつ
たが他に交流・財政面等多くのたい
せつな事項が残つているが、紙面の
都合上省略させていただいた。どう
もまとまりのないものとなつてしま
つたが、一応反省を終つてことにす
る。

(梶 浦)

今年度の計画

ことしの研究テーマ

名古屋の歴史と文化について

一班 尾張藩について

西川 源敬公とその周辺について

寺本 維新前後における尾張藩の動向

*杉浦(考) 藩と城と庶民

百瀬 維新前後における尾張藩の動向

(青松葉事件を中心に)

水野 宗春時代の尾張藩

柴田 尾張藩の財政と藩札

二班 庶民と文化

西川(義) なごやことは、大正時代の名古屋

手電石線風物誌

*井村 庶民の生活と名古屋気質について

伊藤 名古屋の寺院と神社

高木 熱田神宮について

浅井 熱田神宮について

伴 宗教的側面から見た幕末期の世相

三班 名古屋のつづりかわり

梶浦 名古屋の都市構造とその変遷

杉浦(考) 名古屋の環境衛生

塚本 名古屋と堀川―経済的側面から―

平野 名古屋市史について

池田 名古屋の古城・尾張藩の反幕府的動向

鈴木 名古屋の町割り

こういつた個人の研究テーマに基づいて、

毎週土曜日の部会において、レポート報告・

発表を行なっていく。また、班におけるミー

ティングも行なっていく。(一班 曜日、二班

二班 曜日、三班 曜日)

新しい試みとして、古文書研究を、毎週日曜

日が4時限以後、伊藤君を実行委員長として

発行する。

《年間計画表》

大毎週土曜日 部会（レポート報告など）

大毎週月曜日 古文書研究

*毎週 班のミーティング（各班ごとに）

大隔週土曜日 ソフトボール大会

大奥地踏査を毎月一度位行なう。

11月17日 奥地踏査 名古屋の古坂めぐり

12月8日 奥地踏査 未定

12月24日 忘年会大コンパ

1月中旬 新年宴会の

3月中旬 おいだい木コソバ

3月下旬 春合宿

新しい学年に入る。

今、現在決まっている行事は、例年行なわれているものばかりであるので、ほとんど、新しい試みを加えていく。

尾張藩「藩主す観」(一)

義春

將軍秀忠にと、ては異母弟であり、親愛の情にあふれ家康の死後はよくその遺言を守り誠意をつくして幕府につかえ、卒直に進言して、將軍の權威を確立することに貢献した。しかも世子光友のため家光の女を夫人として迎えたので尾張家の權威も、また重きを加え、はるかに諸大名に越えるものがあった。

宗春

將軍吉宗の幕政改革の方針に不満をいだき、独自の見識を立てて、藩政をおこなった。彼は相統後まもなく「温知政要」を著わして、京都から出版し、幕府の緊縮政策と干渉主義を批判し「慈」をモットーとして權威主義をしりぞけ、放任政策を宣言した。しかれいろいろの弊害があらわれて、ついに退隱謹慎を幕府から命ぜられた。

（木野君のレポートより）

我が郷研への提案

ユートピア

伴 金美

郷研としてのすべての行動の目標は、郷土をよりよく、より身近に識ろう、忘れかけている故郷を再体験しようとするところにあると、どこかに書いてあったかと思う。その線にそって、今や、まこうということを日学活動の中にもりだくさん取り入れつつある。ところで、日学活動として、もう一つ研究活動がある。前者と分離して、このことを考えているわけではないが、ここでは一つの問題としてとり上げたい。今までの研究内容から見ると、どうも資料・史料に拘泥しすぎているのではないかと思われる。確かに

郷土を識るためには、資史料は不可欠である。現実的にいっても、自分自身、資史料等を知っているわけではないし、研究発表の場で、その内容を紹介してもらい、真実を識っていくのは、奥に意義のあることと思う。しかし郷土を再体験し、愛着を感じ、まさに郷愁をひたる境地と資史料を識ったこととの関係が、どうも私にとっては、きりしない。もともとこれは、私個人の責任かもしれない。さらに郷研の面々と、前二者との関係もあまりは、きりしない。ただぬかるのは、その人か、その事実に興味があるらしいというだけのような気がする。事実という怪物相手に私なんぞは回苦八苦であって、研究の内へ、自分自身を染み込ませるなんてとてもできないような気がする。事実という怪物を前に平伏するのみで、それを料理するなんてとてもである。活動しだして、まだ半年だから、こんなことを言うのは、誤っているかもしれない。ここでおもいきって、ファイリションをどし

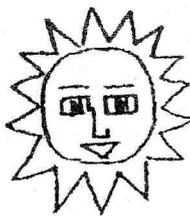
どしどしいれたらどうであろうか。実証性を主張される方がいるかもしれない。しかしいくら実証度を高めたところで、私たちの程度ではそれは知れているのではないだろうか。より広い知識を得るために郷研に入った人もいるに違いない。知識拡大(好奇心)は、まさに、古来から人間の性である。しかし、現実には郷土の知識領域の拡大にもかかわらず、むしろそれに冷めたささを感じる。

別にフィクションといっても、ウリの品評会をやれと言うわけではない。その程度は、郷研諸君には、御理解していただけのことと思う。もつとも事実認定に時間をとりすぎて、それを徹底的に料理するのが、できなかつたのが、本当かもしれない。逆に言えば、統一テーマを決定した後で、研究内容を決めるという方法でなくて、個々の人が、長年にわたって興味を感じ研究している内容を、自由

に発表しあう形式のほうがいいではないか。その中でまたグループ研究もなされていくのではないか。

郷研の諸君は、郷土を切に愛し、郷愁に引きつけられた人ばかりであるから、その郷土に対してどのような思い、どのように考えるかを、お互い同士が盛んに出しあえる場を望んでいると思う。しかし、お互い同士、資料にふりまわされ、そしてその事実を「郷土をよりよく識ろう」でおおいかくしているにすぎないような気がする。紋切調に自己の創作に没頭せよと言っているのではない。ただ、研究内容にもっと、浪漫性があってもよいのではないかと言っていることである。

—— 有言不実行の男より ——



昭和43年度名古屋大学郷土研究会 会員名簿、住所録

*4年生

津坂 峰隆
樋口 清司
山岸 章

工学部
理学部
経済学部

南区四条町4の4
四日市市富田一色町12の12
海部郡甚目寺町西今宿(海部郡)光和町子
(帰省地)石川県石川郡鶴来町月橋118

-1966
四日市 65-4730
海部 44-4118
0560

*3年生

梶浦 博一
西川 義永

工学部
経済学部

四日市市富州原町8の12
若区 巷栄町7の57

四日市 65-0547
661-2723

*2年生

伊藤 明徳
西井 洋博
井本 正司
塚本 忠政
杉本 浦考敏

L2.11
L2.14
S2.15
S2.32
S2.51
S2.53

春日市下市場町548
千種区猪高町藤森作田137
四日市市東富田町28の30
昭和区白金町6-31
北区名城町2-9
碧海郡高浜町高取小、林68

701-7246
871-0854
0566-53-2482

*1年生

池田全	L1・21	稲沢市日下部町松野 438
杉浦考	L1・23	豊田市元城町 2の48
浅井隆	L1・24	熱田区三番町5の9
野善	L1・31	刈谷市小垣江東中根 45の1
伴美	L1・33	知多郡大府町吉田平地 132の1
高木明	L1・33	瑞穂区龜城町 6の27の10 (帰省地) 岐阜県不破郡関ヶ原町 3125の8
白敏	S1・21	知多郡阿比町福住
水野雄	S1・52	丹羽郡大口町豊田二見 65
柴田雄	S1・52	一宮市宮西通り5の10
鈴木真	S1・52	蒲郡市三谷町東前 62
梶谷	S1・52	

881-3997

-宮 31-2884

*先輩

高島英明氏	工学部 (40年卒)	千葉県市原市山木 44の4	宇部興産	山本 繁
鈴木弘氏	教育学部 (42年卒)			
保坂英雄氏	経済学部 (42年卒)	名古屋市中区西川端町 9の22		
松山博氏	経済学部 (42年卒)	名古屋市昭和区丸屋町 5の64		
片山勝治氏	法学部 (43年卒)	尚清市又米字荒子 47		

編集後記

○詩はどうでしたか？、つまらないって？
そんな事言わないで下さい。僕の今の気持ち
ちは、詩のような淡い恋愛をしてみたいですア
と、これだけ。
(圭井)

○僕の担当の関ヶ原の合戦では、絵や図がぬい
のでたいへん困った。僕が一番苦労したとこ
ろである。又さし絵もなるべく関連づけて
書いたつもりである。僕の字はちよと見ろ
と読みにくい。一字一字味わって読んでほしい高木
○ガリを切るのは初めてなので、うまく出きたか
どうか不安だ。北田氏の原稿4枚だけなので、
苦労なしにやれた。
誤字などは詩してちようだい。
(鈴木)

○ちよととかたくなかったかな、この号は、
来号はもっと柔かく行こう。
期待しててね。
(丁丁)

のすたるじす 為4号

— 名大祭総括号 —

- 発行所: 名古屋大学郷土研究会
- 発行日: 昭和43年12月7日
- 編集委員長: 寺本忠司
- 編集委員: 浅井隆繁、高木義明、
鈴木真吾

(非売品につき販売いたしません)

42/10/11

NAME. _____